

博士論文の要旨

専攻名 システム創成科学専攻

氏名 川池 智子 (群馬県) 印

博士論文題名 家族の社会的支援ニーズに関するミックスドメソッドアプローチテキストマイニングによる障害児の親の記述データ分析を中心として一

本研究の目的は、障害児をもつ親のニーズの実態を分析し、その「社会的支援」の機能を明らかにすることにある。本研究の仮説は、「障害児をもつ親の「社会的支援」ニーズは、主観的ニーズの顕在化によって表明される。」というものであった。

この目的を達成するために、障害児の親、総計1000名近くの主として自由記述によるテキストデータを、テキストマイニングと「質的統合」を中心に用いて分析した。実施した調査は、7人の親へのインタビュー調査、および、2006年（障害をもつ幼児から成人期の保護者）、2011年（障害をもつ幼児・小学生の親）、2012年（障害をもつ幼児の親）に対する質問紙調査を実施した。

2006年の調査の分析結果では、相談時の回答の中で最も多かったキーワード、「不安」が含まれる記述からは、「支援によって不安が減った」、「先の見通しがつかず不安だった」、「療育回数、相談回数も少なく不安で辛かった」、「診断が曖昧で不安が大きくなった」、といった主張が抽出された。また、「療育施設の増設や専門家を配置」「情報や相談の場の充実」「専門機関の連

携」、「レスパイトサービス」、「親の会の充実」などが乳幼児期のニーズとして求められていた。

2011年の調査結果からは、障害児の親は、専門職によっても、いわれのない傷つきを体験していたこと、子どもに代わって“初めて障害に会う”時、子育てのスタート地点における「支援」はどうあるべきか、医療職のみならず、親への支援の原点が示唆された。

2012年の調査の結果は、親の主張が、2006年調査と共通部分が多かった。「障害者福祉改革」が実施されたにもかかわらず、幼児期における障害児の親のニーズがシステムとして十分支援されているとはいえないということ、インフォーマルなピアサポートの機能をもつはずの親の会が、フォーマルなサポートの代替をしていた。

調査分析結果から、支援が不適切なことへの親の抑制された「異議申し立て」が、自由記述の多くに含まれていたことはわかった。匿名性をもつ記述式調査であったからこそ、これらのニーズは顕れたと言っても過言ではない。支援に満足したという回答も少なくないが、満足したというニーズの大半が、子どもの発達に関するものであった。親自身が求めるニーズの多くが満たされず、満たされないことを表出できていなかった。専門職からニーズへの支援を受けたにもかかわらず、むしろ、そのことで「不安」が増したという統合された親たちの「主張」もあらわれた。それらの「不安」が潜在化しているうちは、専門職から適切に支援されず、究極の不安は、「親亡き後」の不安であった。他方、「不安」は障害児の親が“ニーズをもつ契機”ともなった。また、自由記述に頻出した「どう」とい

博士論文の要旨

専攻名 システム創成科学専攻

氏名 川池 智子

う構成要素の検索を通して、子どもの障害がわかってまもない頃、「何をどこに相談してよいのかもわからない」混沌とした中にある親の姿がみえてきた。出生順位、第一子の親の回答にその傾向が強いこともわかった。初めての子育てであることと、さらに子どもが障害をもっていることという条件が重なった時、特にそのニーズを受け止めることが必要であることが確認された。子育て初期であること潜在的ニーズである、“助けて”と言う力が弱い親たちはヴァルネラブルな存在であった。「障害を受容した」障害児の親」になりきっていない時期の親たちの記述であるからこそ、燻っていた潜在的ニーズと状況が鮮明に記述されていたといえる。以上のことから、本研究の分析において、「障害児をもつ親の「社会的支援」ニーズは、主観的ニーズの顕在化によって表明される。」という仮説は論証された。さらに、親たちの社会的支援ニーズは、【子どもの潜在的ニーズの理解させてほしい】【親の潜在的なニーズを汲みとってほしい】【“委ね・託したい” というニーズ】【子育ての「伴走」のニーズ】【オリエンテーションのニーズ】【特別な配慮のニーズ】【特別に扱われないニーズ】等という10に類型化された。

結論は、障害児という「当事者」だけではなく、親

も障害児を育てる「当事者」として「権利の主体」であるということである。この「権利」は、特別な配慮が必要な障害児をもつ親に人間らしい尊厳のある人生をおくる権利を保障する「生存権」である。権利が全て保障されない社会福祉政策を打開するのが「ソーシャルワークの倫理」であった。これまで日が当てられなかった家族の潜在的な社会的支援ニーズを顕在化するためには親の潜在的な社会的支援のニーズを明らかにすること、所謂「家族の声なき声」を聴くことを通して、親を「権利の主体」と捉えなおすこと、これが社会福祉実践・研究の課題である。